“富山の山とつくり手をつなぐ 2017”に参加しました！

平成 29 年 6 月 27 日（火)、“富山の山とつくり手をつなぐ 2017”と題してひみの里山杉活用施設の見学会と講演会が開催されました。

ひみの里山杉活用施設として、見学会では射水市内の手崎ふれあいセンター、富山市内の富山県議会・富山県近代美術館の 3 施設を巡り、講演会では富山県議会の設計をされた船崎氏、富山県近代美術館の設計をされた湯浅氏のお話を伺いました。(当センター職員は日程の関係で手崎ふれあいセンターの見学会には参加していません。)

富山の杉活用協議会を中心に 50 名余りの方が参加され、マイクロバス 2 台が補助席まで満員になる大盛況でした。

富山県議会・富山県近代美術館ともにひみ里山杉は内装材として使用されています。ひみ里山杉は通常の杉より色合いが優しく淡いピンク色が美しいことが特徴です。

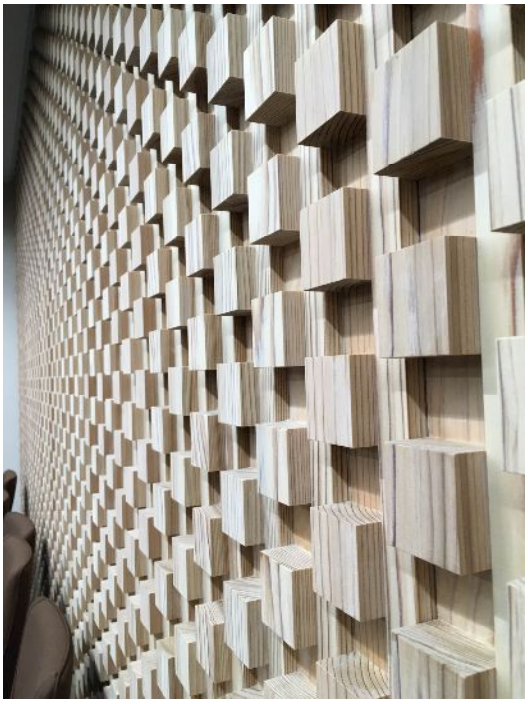
富山県議会では吹き抜けのエントランスホール全体に縦格子に木材が配置され、間接照明が柔らかく灯る厳かな空間になっています。各会議室にも多様なデザインの内装が施されており、木が使われている箇所が目を引く、美しい仕上がりとなっていました。

富山県近代美術館はガラス張りでアルミを多用した建物ですが、中央廊下に木がふんだんに用いられています。縦格子が細かく配置された廊下は木材が吸音するため、一歩中に入るとしんと静まり作品に向き合う前の静かな空間が作られています。縦格子は 1 本 1 本角を削られ丸みを帯びた形に加工されており、木の美しさを生かしつつも目立つ箇所をなくす事で、美術館として作品を展示する際に建物が主張しすぎないように細心の配慮がなされていました。

富山で育まれたひみ里山杉の美しさと、その美しさを引き出すように設計者の方が苦心されたことが、見学会・講演会通じて強く感じられました。

ひみ里山杉は元々ボカスギと呼ばれていた杉です。江戸時代には造船用材として、明治時代には電柱・電信柱として重宝されていました。平成 24 年からはひみ里山杉としてブランド化されています。薬品注入性がよいため、不燃・準不燃木材に加工しやすく県内の様々な施設で使用されています。

(富山県議会の吹き抜けのエントランスホール。縦格子は全て木材。)



（富山県議会 新会議室の壁面材 ichimatsu。市松模様に木材が配置。）

（富山県議会 大会議室の壁面材 sazanami。三角柱の木材が横格子に配置。）

（富山県近代美術館入口）

（富山県近代美術館
中央廊下での解説の様子）

（富山県近代美術館　中央廊下）

（講演会の様子。）